わが愛する執筆人生の始まり（モラトリアム終了のお知らせ）

細雪美紅（リリーナ）

偉大なる・シド先生と訳者様への愛

あれは覚えているぞ。専門学校生時代だ。机にこっそり隠していたエロ本…じゃなくて、別冊宝島社の『シナリオ入門』。
僕は当時、仙台のビジネス電子系の学校に通ってい（ｒｙ）、まあそんな話はさておいて（さておくな！）、早い話、よその科（ゲームデザイナー科）に恋をしていた。企画書を書いては職員室に持ち込んでいた。ビジネス学はバカげたお遊戯のように思っていた。

でも、だからと言って「じゃあうちの科にいらっしゃい」なんて当然言われるわけもなく、どうしたら親の納得したビジネス科でゲームデザインの勉強ができるか必死に考えた末、駅前のジュンク堂で“座り読み”をしてなお必死にあらゆるジャンルの勉強をすることになった。

そんなある日、宝島社の本棚を見つけた。「おお、これこそ神！いろんなジャンルの本の宝庫じゃないか！」とたちまち惹かれ、とりあえずゲーム製作に必要そうな本を買い込んだ。科学、編集、シナリオ。そう、のちに僕の闘病からモラトリアム卒業、精神的に参った時のカウンセリングまですべて請け負ってくれた、偉大なるシド・フィールド先生の本を、僕は読みもせず、何も考えずに買ったのである。

しかも、この本を暗記するほど読むようになったのは、購入してから数年後だった。

卒業して、初めて書いた、ゲームと関係ないシナリオは、「綺麗に解決して終われない」という最大の課題を残した。僕は真夏の炎天下、現実逃避してチャリンコで現在の栗原市から登米市まで走った。実話である。一円も持たず、飲み物も持ち物も持たず。死ぬ気だった。暑さなんか感じなかったし、冷たい現実に打ちひしがれていた。

しかし、ある走り書きとメモ帳だけは、持っていた。「テーマ（中略）、プロットポイント（略）」それは、シナリオを書く前に軽く読んだだけの、『シナリオ入門』の醍醐味であるシナリオ制作プロセスの一部だった。

「ああ、僕は、死ぬと思っても、これだけは離さなかったんだな」

途端に世界は暑さを取り戻し、僕は、「あのシナリオを完成させたい、続きが書きたい！」と思い、命がけの全力疾走で自宅に戻り、読み直した『シナリオ入門』は、以来、シミができるほどのバイブルになったのである。

今は大人になり、さまざまな文章を書くことに特別困らないほどの腕前を身に付けた。ので、読まな…くなったと思ったら、今でも一作ごとに初心に帰って読んでいる。

訳者様との相性も良かったのだろう。まるでベテランからカウンセリングを受けたような心地よい筆致。作家として誰しも抱える悩みをバッサリ斬り落とす日本語の潔さ。

こうして、今日も今日とて執筆に勤しみ、文章農家として生きる僕にとって、ここまで悟りを開けたのは、何より『シナリオ入門』あってこそ、なのであった。

人が読むには少々汚らしい本になってしまったが、それも愛ゆえ、である！